

「メルシー僕。」

工藤 大嘉

CAST表

メルシー僕。

僕（博文）・・・小さい頃から成績優秀で親に敷かれたレールの上を歩く人生を送ってきた。エリート会社に勤める真面目な男。

A・B・C・D・・・博文の思考。

幸子・・・博文の母。幼い頃のトラウマから、社会的地位をどこまでも高くしようとする。

E・F・G・H・・・幸子の思考。

トメ・・・幸子の母。

役員・・・市役所の役員。

僕「部長、そろそろお会計を・・・21600円なので1人5400円ですね。」

えっ、いいんですか？いやだめですよ出しますよ。えっそうですか？すみません。ありがとうございます。」

A「無理矢理つれて来られたんだから当たり前だ陰毛」

B「on the」

ABC「head」

D「すみませんもありがどうも思っていないわ。陰毛」

A「on the」

ABCD「head」

僕「あっすみません終電がそろそろなんで、すみませんお先に失礼しますーすみません。」

A「本当にそうか？」

B「電車はまだあるぞ。」

C「帰りたいだけだろ。」

D「言えよ。お前らなんかと話してもちっとも面白くないから帰りまーすって。」

僕「じゃあみなさん楽しんで下さい。お疲れ様でした。」

シーン「未来と過去」

僕 ABCD スローモーションで縦横無尽に歩いている

僕 ABCD 「こうしてゆっくり歩くことで未来を見ることはできないだろうか？マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるように。」

僕 ABCD スピーディに歩く

僕 ABCD 「こうして早く歩くことで過去に戻れることはできるだろうか？マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるように。」

僕 ABCD 倒れる

シーン「過去の自分」

A「おぎゃーおぎゃーおぎゃーおぎゃー。」

僕「ん、んーん？？なんだこのレンコンの断面のような顔をした醜い子供は？」

僕「いしざわ ひろふみ・・・おれだ！」

僕「このレンコンの断面のような顔をした赤ちゃんがおれだと！母さんに昔の写真は燃やして貰おう。若しくは写真写りが一番良い物を残して他は捨ててもらおう。そもそもここはどこだ？なぜおれがいるんだ？」

A 泣き声を強める

僕「ほんとうにうるさいな。何をそんなに訴える必要があるんだ。まるで蝉のようだ。いや蝉のほうはまだマシだ、一週間しかなかないからな蝉は。お前も少しは見習ったらどうだ。」

△ より一層泣き声を強める

僕「なんなんだ？なにがほしいんだお前は？ミルクか？ミルクが欲しいのか？」

近くにあるほ乳瓶を取り△に飲ませようとする

僕「違うのか！ミルクじゃないのか！じゃあなんだおむつか？？この脱糞野郎め！」

おしめを変えようとする僕。

僕「もうなんなんだよ！なにがほしいんだよ！・・・」

変な顔をして変な動きをする

△「ぎゃばばばでゅばばばばば！にやまままま！」

僕「笑ってるのか？笑ってる、うん笑っていると捉えたぞ。もういいか。じゃあな。」

間

僕「こいつ yes か no しか言っていないんだな。なんだかうらやましいな。」

僕「とうかおれはどこにいけばいいんだ？」

会社の明かりに切り替わる

ABC D 博文の後ろに立つ

僕「ん？職場??」

ABC D 「仕事だ仕事だ。」

僕「仕事か・・・なんだったんだらうあれ。」

僕「おはようございまーす。あっさつきも言いました？すみません・・・やっぱ疲れてんのかな。」

上司に呼ばれる

僕「はい！」

僕「あーはいはい。はい。・・・おぎゃー！」

僕「あっいえ、すいません。ちょっと疲れてるみたいではない、すいませんでした。わかりました。今日中には終わらせませす。はい。すいませんでした。」

自分の席に戻る

僕「そうだよな、まあそうはいかないよ。仕事だ仕事だ。」

ABC D 「仕事だ仕事だ。」

僕 ABC D 会社の仕事を早送り

僕「ふう、終わった終わったお疲れ様でした。」

シーン「自宅」

僕「ただいまっつと。そういえば最近掃除してないな。」

冷蔵庫を開けてビールを取り出す

僕「あー、うまい。」

間

△「こうして1人していると色々な事を考えるよな。」

B「おれはこのままでいいんだらうかとか、この先もずっとこの生活なのかとか。」

C「解決できもしないことを考えてしまう。」

D「仕事をしている時はこんなこと考えなくて済むのに。」

ABCD「それでも今の仕事に満足していない自分がいる」

メールの音

僕「ん？また母さんか・・・」

シーン「母からのメール」

幸子の後ろに EFGH が縦一列に並んでいる

幸子「博文、元気でやっていますか？ちゃんとご飯は食べていますか？今度お父さんが取ってきた山菜送りますね。仕事は順調ですか？無理せずに頑張ってくださいね。じゃあまた。連絡します。愛してる。母より。」

A「ちなみに俺の名前は博文。」

B「会社の名前は言えないが大手企業に就職した。」

C「伊藤家の1人息子。父がいて母がいる至って普通の家庭。」

D「ちなみに母親からのメールは30秒以内に返信しないと再びメールが・・・」

メールの音

D「来る」

幸子「博史、元気ですか？ご飯たべてますか？仕事は順調？隣の関口さんも気にかけてくれているよ。今度関口さんと東京に顔出しに行くからね。体気をつけてね。愛してる。母より」

博文 携帯を握りしめる

A「母さんが僕に愛情が無いことなんて知ってた。」

B「母さんは大手企業に勤めている僕が好きで」

C「息子のことをこんなに考えている自分が好きなんだと。」

D「愛してるって言葉が僕は心底嫌いだ。」

メールの音

幸子「博史？返信がないけど・・・母さん心配です。愛してる。母より。」

博文 嫌々返事を返す

博文「母さん返事遅くなってごめんよ。残業があつてさ、最近仕事頼まれて大変だよー！父さんの山菜楽しみにしてるよー！関口さんにも元気でやっってるってよろしく言っといてー！」

メールの音

幸子「よかった、博文がんばってるんだね。関口さんにも伝えておきます。山菜楽しみにしててね・・・愛してる。母より。」

メールの音

博文「愛してるって言葉が僕は心底嫌いだ。」

シーン「母の日常」

父親やセットはダンボール

幸子「あらあなた戻ってたの？」フリーズ

☑「戻ってるならご飯ぐらい作ってよ」

☒「靴下も脱ぎっぱなしだし。」

☑「お金入れればいいと思いやがって。」

☒「ほんと使えない。」

幸子「今からご飯作るからね、まっけてね。」

幸子 料理をする

幸子「博文から連絡があってね、頑張ってるって仕事。なんか色々仕事も任されているみたいで、大変そうだったわ・・・ねえ、聞いてる?？」

幸子「あなたが取ってきた山菜も送るって言ったら喜んでたわ。あっそうだ今度、関口さんと博文のところに遊びに行ってくるわね。三日くらい家にいないから。ねえ、聞いてる?？」

幸子「楽しみだわ、博文に会うの。ふふふ。」

幸子「博文また大人っぽくなったりしてねえ、ドキドキしちゃうわ。なんてね、あははははは。ねえ聞いてる?？」

幸子「なに着ていこうかしらねー、早めに決めてクリーニングに出しておかないと。博文に恥ずかしいと思われたら嫌だしねー。」

間

幸子 料理をテーブルに持っていく

幸子「はい、できたわ。」フリーズ

☑「なにか言ってくれてもいいじゃない。」

☒「ご飯が出て来るのが当たり前だと思いやがって」

☑「毎日、晩ご飯納豆にするぞ」

☒「このはげ！SEX下手なくせに性欲は無駄に凄いんだから、このはげ!」

幸子 食事に戻る

間

☑「夫婦間に愛なんてもはやなかった。」

☒「エリート会社に勤める夫を持つ奥さん。」

☑「その称号さえあれば私は幸せだった。」

☒「だけど人間欲深いモノで、何十年も同じ暮らしをしているとそんな称号がちっぽけに思えてくるの。」

☑「結婚してエリート会社に勤める夫という称号が欲しかった男と。」

☒「エリート会社に勤める夫をもつ奥さんという称号が欲しかった女がくっついた。」

Q 「私たちにはセックスフレンドほどの好意や愛すらなかった。」
R 「そんなことはわかっていたの。でもその称号がわたしを幸せにしてくれる。それだけでわたしはよかったの。」

E 「でも人間って不思議よね、常にまた上を求めちゃうの。」

F 「博文が生まれて、私のステータスに子供が増えた。」

G 「大手企業に勤める息子を持つ親。」

H 「私はまた一つ社会的ステータスが上昇するの。また一つ幸せになれるの。」
幸子 「ごちそうさま。お風呂わかしておくわね。」

幸子 お風呂の蛇口を捻った後にコンビニ袋を持ちトイレに入る

過去のトラウマを思い出し嘔吐する。

E 「いつからだろうね、この時間になると嘔吐してしまうようになったのは？」

F 「あの日だよ、私が小学校5年生の時。」

幸子 ポケットから写真を取り出す

G 「当時の写真を、私は自分を戒めるように今だに持っている。」

H 「1992年9月10日。時計の針は18時43分12秒を指していた。」

シーン「トラウマ」

E 「机はここ。母さんが一生懸命お金を貯めて買ってくれたお気に入りの机。」

F 「机の上にはお母さんがいつもより豪華なお菓子を用意してくれていた。」

G 「窓からは向かいの鈴木さんの家の馬鹿犬が吠えている。」

H 「私はいつものようにお気に入りの机で勉強していた。」

EPFGH 後方で母を見守る。

インターホンの音

役員 「斉藤さん。いるんですよねー。市役所の者ですー。市民税の延滞金の件で伺いましたー。」

E 「そして私はいつものようにお気に入りの机の下に隠れて耳を塞いで、息を殺した。」

間

役員 「いいかげんにしてくださいよ。何回訪問させるつもりですかー？」

E 「私はいつものようにお気に入りの机の下に隠れて耳を塞いで、息を殺した。」

間

役員 「斉藤ー！いるのはわかってんだよ！はやくでてこいよ！これ以上待つてられないんだよ！勤務先に連絡して給料差し押さえちゃうよー！困るでしょー！お互いうまく付き合うためにきてんだからさーいい加減開けてよ。」

トメ 「はい、すいません。」

役員 「いるんじゃないー悲しいなー。いるなら最初から開けてよ。」

トメ 「すいません、ちよっと夕飯の準備をしてて。」

役員「あーそうなんですかあー、で市民税、住民税の支払いの方はどうですか?」

トメ「ちよっとまだお金を作れてなくて・・・もう少しだけ待ってもらえませんか。今日のところは何とかこれで勘弁してください!」

トメ「家にあるトマトをポケットに入れる」

役員「ポケットに入ったトマトを取り出しながら」

役員「今日のところはって斉藤さん前も同じこと言っていましたよー、あれー僕の勘違いかなー。あはははは。ていうかこれでなんとかなるわけないでしょう。本当に差し押さえになつてしまいますよー斉藤さん。」

トメ「そこをなんとかしていただけませんか?あと一ヶ月いただければお支払いできますので今日のところはこれで勘弁して下さい・・・」

トメ「家にあるナスを渡す。」

役員「もう信用出来ないですよ斉藤さん。何回このやりとりしてると思ってるんですかー???だからねえ、こんなんでなんとかなるわけないでしょうが!」

トメ「斉藤さんのところで取れた新鮮なナスなんです、たぶんこころへんで一番おいしいナスです、素揚げにしてもおいしいし、味噌汁にしてもとってもおいしいナスなんです!」

役員「だから!人の話聞いている?ナスで借金どうにかできるわけないでしょうが!上の方からも今日ダメなら差し押さえの方向でって言われているんですよ!」

間

役員「それに今もらつてる母子家庭の援助金も出なくなっちゃいますよー」

トメ「すいません、そこをなんとか。家のものはなんでも持つていって結構です。」

役員「家の中を見回る」

役員「家のものつて、なんにもないじゃないですか。」

机の方に行き幸子を見つける

役員「あーこんにちは。娘さん帰ってたんですねー。ずいぶんかわいい娘さんですねー。」

トメ「ええ、まあ。」

役員「可愛いなー。いくつになるのー?」

幸子「12歳です・・・」

役員「へーそっかー。可愛いなーほんと可愛いなー。おじさん興奮しちゃうなー。」

トメ「えっ!?!」

役員「あははははは、斉藤さんどうでしょうねー借金。」

トメ「娘から離れて下さい!」

役員「恐いなー、挨拶しただけなのになー。」

役員「斉藤さん借金どうしましうかねー。」

母の母「・・・」

役員「歌い出す」

役員「借金がー返せない借金がー返せないー私はどうすればいいのかしらー。」

役員 トメの方をじつと見る

トメ「この子をどうしろっていうの?!」

役員「いやーね。最近はロリコンっていう連中もいますからね、体売ってお金稼げるんじゃないかと思ってるね。需要あるんじゃないですか?でもなー、そんなひどいことはさせられないよなー。」

トメ「なにが言いたいんです!?!」

役員「いやーね、そんな変な輩に遊ばれてお金を稼がせるよりはね僕みたいな人と遊んでお金もらえた方がいいんじゃないかなーって思うんですよー斉藤さん。」

トメ「この子にそんなことはさせません。」

役員「じゃあ借金どうしますー??」

トメ「……」

役員「どうするかって聞いてんだよ!!!」

トメ「……くらっくらっくらっくれるの?」

幸子「お母さん?」

市役所「それはこの子の頑張り次第でしょうねー。ねー。」

幸子「……」

トメ「差し押さえのことなんとかしてくれるの?」

市役所「その件に関しては僕が上手く言っておきますよー。まあ、娘さんの頑張り次第ですけどねー。ねー?」

トメ「……わかりました。」

幸子・役員 薄暗いところで性行為を行っている

EFGH「ぐるぐるぐるぐる。ぐるぐるぐるぐる。」

E「こうして私は市役所の人と遊んだ。」

F「市役所の人に来る度」

G「母はどこかへいなくなり」

H「私は一生懸命あそんだ」

EFGH「18時43分12秒にお気に入りの机の上で」

EFGH フリーズ

E「そしてわたし」

F「のこころは」

G「こわれ」

H「ん」

E「んん」

F「た。」

G「んん」

H「ん」

E「わたし」

F「は」

G「きめ」

H「た」

母「金持ちになって世間に唾を吐きかけてやる」

シーン「カレンダー」

幸子「カレンダーに印を付けている

幸子「ふふ、もう少しよ博文。もう少しで会えるからね。」

幸子「あつ、もうこんな時間。買い物にいかなくっちゃ。」

博文「カレンダーを見ている

博文「もう明後日か、母さんくるの・・・母さん・・・母さん・・・もうおれは疲れたよ。」

幸子の日常の早回し

博文の生活の早回し

幸子「カレンダーの前に立っている

幸子「ふう、関口さんは急用でこれなくなっちゃったけど、やっと博文に会えるわ。博文、待っててね。」

シーン「僕はどこ？」

博文「すいません、お待たせしました。これが企画書です。はい、はい。いやでも・・・はい、そうですか、でも僕の意見としてはここは・・・はいはい、はいはいはいはいはいはいはい！」

博文「お疲れ様でした！！！」

会社から出て行く

博文「母さん、もう疲れたよ。なにかも。僕が喋っている感じがしないんだ。周りの環境が僕を乗っ取っているような感覚だよ。何一つ自分なんてものがないんだ。なにかもが造られた世界なんだ。この声もこの手もこの足も全部僕じゃないんだよ。一緒に造り直そうよ母さん。母さん。母さん。」

メールの音

博文「母さん、いよいよ明日あえるね！あしたはいつもの国立駅に来てくれ。」

幸子「ん??？」

幸子「携帯を見る

幸子「わかった！国立駅ね、楽しみ楽しみ！！あと関口さん急用が入ったみたいで来れなくなっちゃったから。愛してる！母より」

幸子「夜行バスで眠る 博文 ベッドで眠る」

シーン「リセットボタン」

天上に首つりの紐が五つある 僕 ABCD が紐の前に立っている。

博文「僕は母さんを救ったんだ、母さんを縛り付けているすべての物を取り除くには母さんのリセットボタンを押すのが一番手っ取り早かったんだ。」

博文「そして今度は僕が僕自身を救うんだ。」

博文「さよなら博文。」

僕 ABCD 首を吊る

シーン「過去と未来」

全員 スローモーションで縦横無尽に歩いている

全員「こうしてゆっくり歩くことで未来を見ることはできないだろうか？ マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるように。」

全員 スピーディに歩く

全員「こうして早く歩くことで過去に戻ることはできるだろうか？ マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるように。」

全員 倒れる

博文「おぎゃーおぎゃー。」

幸子「はあ、はあ、はあ、ありがとう、生まれてきてくれて、ありがとう。」

電車の音

チャンチャン